

皮肉的表現における面白さと韻律の関係の検討

A study of relationship between humor and prosody in sarcastic expressions

中村 太戯留
Tagiru Nakamura

武蔵野大学 / 慶應義塾大学

Musashino University / Keio University

tagiru_n@musashino-u.ac.jp / tagiru@sfc.keio.ac.jp

概要

ユーモアには何らかの不調和が関与することが知られている。しかし、ユーモアを生じない不調和もあり、ユーモアを生じる条件は不明である。本研究では、韻律を有する皮肉的表現を用いて、文脈情報、発話内容、そして発話韻律の組み合わせで、不調和とユーモアの関係を実証的に検討した。結果、ネガティブな文脈とポジティブな内容と韻律の組み合わせの面白さが一番高く、ユーモアは文脈との不調和数と関係する可能性が示唆された。

キーワード：面白さ、皮肉、韻律、不調和解消、意味づけ論

1. 目的

ユーモアには何らかの不調和が関与することが知られている(Suls, 1972)。意味づけ論(深谷&田中, 1996; 田中&深谷, 1988)によれば、相手が何らかの発話をした場合、何が語られたか(発話の意味)に関する理解の相に加えて、どう語られたか(発話者の意味)に関する理解の相が重要な役割を果たすと考えられている。発話の意味は対象把握や内容把握により構成されるのに対して、発話者の意味は意図把握、態度把握、そして表情把握により構成される。

ユーモアを生じうる会話形式の表現として、例えば、小咄を挙げることができる。「芋屋の娘さん年取ったねえ」「うん、ふけたふけた」では、1つめの発話が文脈、2つめの発話がオチとなっている。「ふけた」は「芋が蒸けた」と「娘が老けた」を掛けており、対象把握の相では、語られている対象が芋なのか娘なのかの特定が試みられ、一方、内容把握の相では、全体としての意味構成が試みられる。次に、意図把握(発話意図の把握)の相では、例えば、オチの発話では聞き手を「笑わせる」や「面白いと思わせる」などの意図が含まれると考えられるが、このように発話によって発話者は何をしたいのかの特定が試みられる。態度把握(発話態度の把握)の相では、発話自体の「枠組み」の特定が試みられる。通常は、感じたまま、思ったままを、ありの

ままに誠実に表現していることが前提となっている。しかし、何らかの不調和を見いだした際には、例えば、「皮肉を言おうとしている」「冗談を言おうとしている」などと発話を捉える枠組みを調節して、不調和解消が試みられる。そして、表情把握の相では、発話者の動作や声の韻律などを手掛かりにしながら雰囲気や様子や印象を感得し理解が図られる。

例えば、「老けた」というネガティブな発話内容をポジティブな発話韻律で話したとすると、韻律に関する不調和が生じていると捉えることができる。また、例えば、相手に料理番組の録画を頼まれて録画したのに誤って別の番組が録画されていたというネガティブな文脈において、相手が「この料理番組はためになるね」とポジティブな発話内容をポジティブな発話韻律で話した場合、文脈と発話内容の不調和に加えて、文脈と発話韻律の不調和が生じ、不調和が加算的に作用していると考えられる(Utsumi, 2000)。この場合、態度把握の相を調節して「皮肉を言おうとしている」と捉えるると不調和は解消する。このように、これら5つの相のどこにおいても不調和は生じうると考えられる。

不調和解消理論(Suls, 1972)は、いつもと違う何か(Forabosco, 1992)や曖昧で不調和な何か(Attardo, Hempelmann, & Maio, 2002)という不調和を、そのギャップを埋める新たな関係性を見いだしたり(Hillson & Martin, 1994)、思い込みの間違いを見いだしたり(Hurley, Dennett, & Adams, 2011)して解消する、という段階的な処理がユーモア理解に関与すると提案している。すなわち、皮肉的表現においては、「誠実に語っている」という発話態度の間違いを見だし、「皮肉を言おうとしている」に調節するという処理がユーモア生起と関係する可能性が考えられる。

本研究では、表情把握に属する韻律に関する不調和と、内容把握に属する文脈に関する不調和のユーモア生起における関係について、皮肉的表現を題材として実証的に検討することを試みる。

2. 方法

実験参加者 23名（女性12名，男性11名）の大学生が実験に参加した。

刺激 皮肉的表現は、まず文脈として私(実験参加者)の行動や発言がもたらすポジティブな出来事またはネガティブな出来事を棒読み韻律の音声で提示し、次にその出来事に対する相手(友人，同僚，仲間など)のポジティブな内容のコメントをポジティブまたはネガティブな韻律の音声で提示する，という構成とした。条件としては、ポジティブ文脈とポジティブ内容とポジティブ韻律を組み合わせた PPP 条件，ポジティブ文脈とポジティブ内容とネガティブ韻律を組み合わせた PPN 条件，ネガティブ文脈とポジティブ内容とポジティブ韻律を組み合わせた NPP 条件，そしてネガティブ文脈とポジティブ内容とネガティブ韻律を組み合わせた NPN 条件，という4条件を設けた。すなわち，同一内容でポジティブ韻律またはネガティブ韻律の「相手のポジティブ内容のコメント」が、「ポジティブな出来事」の際は字義通りのコメントとして、「ネガティブな出来事」の際は皮肉なコメントとして，解釈が可能となる。合計で48表現(12のストーリーに対して，2文脈[ポジティブ，ネガティブ]×1発話内容[ポジティブ]×2発話韻律[ポジティブ，ネガティブ])を用いた。なお，音声は声優にあらかじめ発話してもらったものを用いた。

手続き 各刺激をランダムな順序で提示し、「面白いですか?」という質問に対する回答を「面白い」「面白くない」を両端とする5件法で回答してもらった。

3. 結果

面白いかどうかの選択肢の「面白い」を5、「面白くない」を1とした場合，PPP条件の平均値は2.82(標準誤差:0.209)，PPN条件の平均値は2.66(標準誤差:0.217)，NPP条件の平均値は3.66(標準誤差:0.161)，そしてNPN条件の平均値は3.09(標準誤差:0.216)であった。これらの4条件の一元配置分散分析を実施したところ， $F(3, 88) = 4.73$ ， $p < 0.01$ ， $\eta^2 = 0.14$ (効果量は大)であった。下位検定として Bonferroni の多重比較を実施したところ，PPP条件よりもNPP条件が($p < 0.05$)，またPPN条件よりもNPN条件が($p < 0.01$)，それぞれ有意に面白さが高くなっていた。すなわち，面白さは，NPP条件が一番高く，PPP条件とPPN条件が一番低く，NPN条件がそれらの中間に位置していた。

4. 考察

不調和の数に注目してみると，NPP条件では，ネガティブ文脈とポジティブ内容，ネガティブ文脈とポジティブ発話韻律，という2つの不調和を有しており，NPN条件では，ネガティブ文脈とポジティブ発話内容，ポジティブ内容とネガティブ発話韻律，という2つの不調和を有しており，PPN条件ではポジティブ文脈とネガティブ発話韻律，ポジティブ発話内容とネガティブ発話韻律，という2つの不調和を有していると考えられる。一方，PPP条件は不調和を有していないと考えられる。すなわち，単純に不調和の数で考えた場合，NPP条件，NPN条件，そしてPPN条件は2つの不調和を有していることから，不調和が加算的に作用するのであれば，ユーモアの効果は同等と予想される。しかし，本研究の結果はこれを支持しなかった。

そこで，仮に，発話内容と発話韻律の不調和を除外してみると，不調和数は，NPP条件は2つ，NPN条件は1つ，PPN条件は1つ，そしてPPP条件はなしとなり，本研究の結果と符合する。仮に，文脈と発話内容の不調和を除外してみると，NPP条件は1つ，NPN条件は1つ，PPN条件は2つ，そしてPPP条件はなしとなり，本研究の結果とは符合しない。仮に，文脈と発話韻律の不調和を除外してみると，NPP条件は1つ，NPN条件は2つ，PPN条件は1つ，そしてPPP条件はなしとなり，本研究の結果とは符合しない。すなわち，これらから，面白さは文脈との不調和の数と関係している可能性が示唆された。

文献

- [1] 深谷昌弘, & 田中茂範. (1996). コトバの意味づけ論: 日常言語の生の営み. 紀伊國屋書店. (Fukaya, M., & Tanaka, S. (1996). *A sense-making theory for real language activities*. Tokyo: Kinokuniya.)
- [2] Hurley, M. M., Dennett, D. C., & Adams, R. B. (2011). *Inside jokes: Using humor to reverse engineer the mind*. Cambridge MA: The MIT Press. (ヒトはなぜ笑うのか, 片岡宏仁訳, 勁草書房, 2015)
- [3] Suls, J. M. (1972). "A two stage model for the appreciation of jokes and cartoons: An information processing analysis". In Goldstein, J. H., & McGhee, P. E. (Eds.), *The psychology of humor: Theoretical perspectives and empirical issues* (pp. 81-100). New York: Academic Press.
- [4] 田中茂範, & 深谷昌弘. (1998). 意味づけ論の展開: 情況編成・コトバ・会話. 紀伊國屋書店. (Tanaka, S., & Fukaya, M. (1998). *A continuation of sense-making theory: Sense-making, literal expression, and communication*. Tokyo: Kinokuniya.)
- [5] Utsumi, A. (2000). "Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from nonirony". *Journal of Pragmatics*, 32(12), 1777-1806.